

第11回 『ルージュの呪縛』 (通算31回)

2005.9.15

ルージュ、言わずと知れた女性の必携品にしてお化粧の基本、口紅のことですね。フランス語で綴りは rouge、でもこれ本当は「赤」という意味です。

古来、女性は(時代によっては男も)赤い口紅をさし、顔色をよく見せ、それをもてなしとしてきました。たしかに赤い唇は美しく、時に妖艶さをも演出し、男たちの心を虜にします。でも、その起源をたどればきっと暗い室内で健康をアピールする手段だったのでは、とも考えられますね。

東洋医学における四診、その第一歩である望診においても唇の色の観察は重要、だれでも簡単に始めることが出来る診察方法です。しかし…、rouge というものがあるくらいですから時には見誤ることもあるでしょう。本当はあまり血の巡りが良くないのに綺麗な赤に惑わされ判断を間違えたり、反対に血の巡りはちつとも悪くないのに紫のルージュ(本当は意味が変!)がそう思わせたり。お化粧である口紅が診察を狂わせるなんて皮肉な話ですが無くはなさそうなお話です。

さて、そもそも四診と呼ばれる診察方法ですが、どうして四つの手段が用意されているのでしょうか。それは「ひとつだけでは判断を誤ることがあるから」に違いありません。正確な診断、これは有益な治療を行うための基本であり、そのために必要となる診察は治療のスタートとして重要なのです。だから、その手段は幾重にも慎重な準備がなされているわけです。

四診は「望・聞・問・切」の四つからなりますが、どの本をみても「望・聞・問・切」は「望・聞・問・切」。「望・問・聞・切」になったり「切・望・聞・問」になったりはしません。あくまでも「望・聞・問・切」なのです。さて、何故なのでしょう。

この順番が古来からかわっていないことには多くの意味が込められています。そう、「その順番を守れ」ということなのです。この順番が入れ替わることにより問題が起こることを古代からの人々は身にしみてきたのです。だからあくまで「望・聞・問・切」。

東洋医学の診察方法が西洋医学のそれと異なることだけに気をとられてはなりません。大切なことは「それがどんな意味をもつのか」という点であり、「なぜそうなのか」を考えなければただの物珍しい診察方法になってしまうのです。もしそうになったら、大切な診察は儀式となり、さしたる意味がないものになってしまいます。診察はあくまでも診断をするためのものであり、雰囲気醸し出すためのものではないのです。

知識を超えて思考の世界へ。どうぞわれわれがご用意いたしました診察室へお出かけください。さあ、本日も漢方診療のはじまり、はじまり。

【本日のkeyとなる生薬】

桃仁 牡丹皮 紅花
当帰 川芎

【本日の内容について、ご確認ください】

桂枝茯苓丸：桂枝、茯苓、桃仁、牡丹皮、芍薬

桃核承気湯：桃仁、桂枝、大黄、芒硝、甘草

大黄牡丹皮湯：桃仁、牡丹皮、大黄、芒硝、冬瓜子

通導散：紅花、蘇木、当帰、枳実、厚朴、木通、陳皮、大黄、芒硝、甘草

治頭瘡一方：紅花、大黄、川芎、荊芥、連翹、防風、忍冬、蒼朮、甘草

当帰芍薬散：当帰、川芎、芍薬、茯苓、蒼朮、沢瀉

温経湯：当帰、川芎、芍薬、牡丹皮、阿膠、麦門冬、人参、甘草、桂枝、半夏、生姜、呉茱萸

加味逍遙散：柴胡、山梔子、薄荷、当帰、芍薬、牡丹皮、茯苓、蒼朮、生姜、甘草

女神散：当帰、川芎、黄芩、黄連、香附子、木香、桂枝、人参、丁子、甘草、蒼朮、檳榔子

ポイント

■「血の異常」と「四診」

浅岡俊之

www.asaoka.org

今回からご参加の先生方へ

本日は四診を題材に取り上げます。以前にもご紹介した東洋医学の診察方法である四診は「望・聞・問・切」の四つからなります。その四診とは以下をさします。

- **望診** : 患者を望む、すなわち自分の目で見ること
- **聞診** : 患者から発せられる音や臭いから状態を推測すること
- **問診** : いわゆる問診
- **切診** : 患者に接することで情報を得ること

西洋医学にも問診や理学所見、血液検査、画像診断など、様々な診断のための手法が用意されています。いったいなぜなのでしょう。

答えはひとつ、「どれか1つだけでは診断できないことがあるから」ですね。逆に言えば「全ての症例で全ての検査をするとは限らない」ということにもなります。当たり前です、診断するのに十分な情報があればよいのであって、「常に全ての検査を行う」ということではないはず。

さて、東洋医学に目を向けましょう。果たして四診は何の目的で四つあるのでしょうか。もう説明の必要はありませんね、「どれか1つだけでは診断できないことがあるから」がただ1つの答えです。

それでは次、「なぜ望聞問切の順番なのか」ですが、これは長い時間をかけて、編み出された東洋医学の知恵なのです。この順番が大切であるということなのです。「望診をしないで切診をするなかれ」ということです。西洋医学に置き換えてみれば「患者の顔を見ないでCTの予約はするな」、さしずめそんなところでしょう。順番を守らないことで引き起こされる信頼感の喪失や様々な問題発生を経験してきた東洋医学が我々に伝える重要な教訓であるということなのです。いかがでしょう、四診の教えは決して漢方薬を選ぶためだけに重要なのではなく、現代医学にも大切なヒントを与えてくれるものではないでしょうか。

漢方薬はもともとひとつの生薬から出発し、それらを組み合わせる技術で発展をしてきました。その経緯のなかで、診察は一度たりとも蔑ろにされることが許されない存在でした。だから具体的な説明がしやすい腹診などに興味が集められがちですが、しかしその本来の意味を忘れなければ、それだけで処方を決められるものではないことは十分ご理解いただけるはず。